

Case Report



血糖値管理アプリ

メディセーフデータシェア™



データマネジメントシステムの重要性 ～活用事例から～



美内 雅之 先生

医療法人伯鳳会 大阪中央病院
内科(糖尿病内分泌代謝・呼吸器) / 栄養部 部長

メディセーフデータシェアについて

メディセーフデータシェアは患者さんが自宅などで測定した血糖値、血圧などの測定データと、食事、運動などの生活イベントデータを管理するソフトウェアです。医療機関向けWebアプリである「メディセーフデータシェア for Hospital」と患者さん向けWebアプリおよびスマートフォンアプリである「メディセー

フデータシェア for Home」から構成されています。患者さんの測定データや生活イベントデータは、クラウド経由で医療機関と共有することができます※1。通信対象機器の血糖自己測定器や血圧計などで測定し、スマートフォンのNFCリーダー部分あるいはNFCリーダー/ライターの上にかざすとデータを取込むことが可能です。記録されたデータはグラフやデータノートで確認することができます。

クラウド型のデータマネジメントシステムの重要性

教育入院中は適切な管理下で治療ができますが、多くの患者さんにおいて、自宅に帰ると治療が不十分になることが散見されます。その問題を抽出するために、患者さんに血糖自己測定を行ってもらい、外来診察時に解析していましたが、効率の悪さが課題であると考えていました。その理由は、外来診察の時点で初めて患者さんから測定データを提供いただけるため、患者さんの実生活と指導の間で時間的なギャップが生じ、リアルタイムの指導ができていないと思うからです。実際には数か月のギャップが生じ、この間に患者さんの生活習慣が変化することもありました。このような状態で生活習慣改善のためのフィードバックをしても患者さんの心には響かないのではないかと考えます。この課題を解決するために、リアルタイムで血糖自己測定データや生活イベントを確認することができるツールの必要性を感じていました。そんな中、クラウド型のデータマネジメントシステムであるメディセーフデータシェアの話があり、導入するきっかけになりました。



※1 メディセーフデータシェアの使い方イメージ

メディセーフデータシェアの機能を活用して患者さんとコミュニケーションを図る

まず、過去に入院経験のある患者さんへのメディセーフデータシェアの導入を検討しました。仕事の関係で教育入院プログラムを組み込まず、インスリンの導入と最低限の治療パッケージで短期入院を行った患者さんがおられました。外来診察でのフォローが必要だと考え、メディセーフデータシェアの使用を勧めました。使用中はしっかりと血糖値や食事の記録をされており、記録することが患者さんの生活のリズムになっていると感じました。

また、メディセーフデータシェアの機能を活用した別の患者さんとのコミュニケーション事例も紹介します。BMIが36.9の症例です。患者さんには、体重と歩数の記録は必須とし、特に体重はこまめに記録してほしいと伝えました。また、可能であれば食事の写真も記録してほしいと要望しました。それまでは体重が増加傾向にありましたが、指導の結果、メディセーフデータシェア for Hospitalで体重をこまめに記録してくれていることが確認でき、体重も減少傾向に転じました。さらに、この患者さんはメモ機能を活用してメッセージを送信してくれました。メモ機能はメディセーフデータシェア for Homeとfor Hospitalの両方に搭載^{※2}されているため、双方でコミュニケーションを図ることが可能です。患者さんもデータを見てもらいたい意識があるのか、記録頻度が増えることもありました。メディセーフデータシェアのメモ機能を活用したコミュニケーションを取ることで、良好な関係を維持しつつ、患者さんの自己管理の質の向上に協力できていると期待しています。



※2 メディセーフデータシェアの画面

外来診察の効率化に繋がっている

メディセーフデータシェアを導入してからは、外来診察時に患者さんへのヒアリングに要する時間を短縮できるようになりました。加えて、患者さんが記録した食事の写真からあらかじめ食事の傾向を知ることができるので、外来診察の前に質問事項

を検討することができ、診察がスムーズになりました。

また、外来受診される患者さんの傾向として、1~2週間くらいは指導したことを守ってくれますが、時間がたつと守れなくなっていくケースがよくあります。当院の場合、受診間隔が長く、1~3か月間は方向修正が効きません。メディセーフデータシェアを使用している患者さんはある程度のサポート管理を受けているという実感を持って外来受診をされており、治療に対してのモチベーションの維持、向上にも繋がっていると感じます。メディセーフデータシェアの導入により、外来診察の前に患者さんの測定データや療養記録を確認できるほか、患者さんと一緒に画面を見ながら指導することもできるようになりました。

メディセーフデータシェアを患者さんへの治療支援ツールとしてもらいたい

血糖自己測定で高血糖であれば少し食べる量を減らした方が良いと考える方や、運動量を増強する必要があるにもかかわらずそれができない方、注射をさぼってしまう方など、自己管理が苦手な患者さんにメディセーフデータシェアの使用を勧めたいと考えています。そのため、自己管理がうまくできず血糖管理が不良な患者さんには、次の選択肢として、入院精査加療かアプリを用いたデータ管理を紹介し、「どちらかトライしてみませんか?」と問いかけています。ある程度的生活習慣や治療のサポート管理を得ることに嫌悪感を示す患者さんは少なく、むしろ自身の治療の質をレベルアップできる機会をウエルカムと考える患者さんも予想以上に多くいます。患者さんには、メディセーフデータシェアは治療支援ツールという位置づけで捉えてもらい、治療の良質化を図るため、自身の治療レベルを向上するために、しっかりと記録してもらい、メディセーフデータシェアを生かしてもらいたいと感じています。

終わりに

教育入院を経て自宅に帰っても、ある程度の治療クオリティを保った生活習慣を確保してもらいたい、その環境のサポート強化を提供していきたいと考えています。外来診察においては、その都度、治療強化のトライ&エラーを繰り返しています。クリニカルイナーシャ(治療停滞)を予防するためにも、特に自己管理が苦手な患者さんへは、メディセーフデータシェアを用いたサポート管理をお勧めし、治療クオリティの確保を充実させていきたいと考えています。

本プログラムは疾病の診断、治療、予防を目的としていません。
著者はテルモ株式会社より原稿執筆料を受領しています。